

部員時代の思い出



ご挨拶と近況報告

翔友をご愛読の皆様こんにちは。竹山です。航空部から離れて早 8 年が経ちました。在籍中の 4 年間はあつという間の印象でしたが、卒業してからの時間の経過もそれ以上に早く感じることに驚いています。

私は現在、日本航空グループの日本エアコミューター(JAC)という航空会社の副操縦士として鹿児島空港を中心に西日本の空を飛んでいます。現在の乗務機種は SAAB340B という型式で 36 人乗りのターボプロップ機です。旅客機の中ではとても小さい分類の飛行機ですが、離島路線や短い滑走路への離着陸など特殊な運航が多く、パイロットとしての醍醐味を味わうことのできる機種でもあります。飛行時間は月に 65 時間程乗務しており、グライダーでの飛行時間(4 年間で 120 時間)をわずかに 2 ヶ月で満たす事を考えると、学生当時は良くも悪くも飛びたくて仕方がなかった私にとってはまさに夢のような環境です。もちろん業務としてのパイロットですので決して楽しいことだけではありません。訓練や審査、実運航に備えて覚えることは多岐に渡りますし、数年後の機長昇

2011 年卒 竹山 翔太

格を見据えて今は勉強の日々です。

さて、今回の執筆依頼を頂いてからネタ探しのためにログブックや久しぶりに航空部 HP を開き過去のブログ等を見返しました。初フライト、初ソロや競技会など、記録を辿って振り返ると当時の記憶はその時の感情と共に、まるで最近の出来事かのように今でも鮮明に覚えています。数ある思い出の中でも今回は先輩方と全国大会を目指した日々と各機材の所感を中心に振り返りたいと思います。

全国大会出場へ向けて

2008 年の秋。2 回生でライセンスを取得した私は新人戦で団体・個人 3 位入賞と勢いに乗っていました。結果は残しているし、全国大会は 2 学年上の重田先輩、岩井先輩とチームを組んで、その 3 番手として全国大会に連れて行ってもらえるだろうと考えていました。しかしそんな美味しい考えも束の間、1 学年上の入江先輩の急な競技会参加表明で選手が 4 人となりチーム編成で揉めることとなります。妻沼の条件等を考えると 1 人外れた 3 人のチーム編成がベストでした。そうなると学年順に考えて私が外れることが妥当です。結局は生意気な後輩のわがままで 2 人ずつに別れた A チーム(重田・岩井両先輩)と B チーム(入江さん・竹山)の 2 チーム編成が決まりましたが、全国大会優勝を目指す先輩方にとっては苦渋の決断だったと思います。受け入れてくれて本当にありがとうございました。

それまではどちらかというに関わることを避けていた入江先輩とのチームはゼロからのスタートと申しました（こんな事言ってますみません）。しかし今思えばこの編成が私にとっては一つのターニングポイントだったのでしょか。重田・岩井両先輩の力に頼れなくなり、2人で何とかして東海関西競技会を突破しなくてはなりません。お互いのフライト談や思った事、感じた事を共有し合い滑空場ではたくさん話をしました。少しでもチームの力になればと。東海関西は結果的にAチーム(重田・岩井)の団体優勝。Bチーム(入江・竹山)はなんとか5位に入賞することができ、全国大会に2チーム出場は十何年ぶりの快挙となりました。

迎えた全国大会。しかし初出場の私にとって妻沼の空は広過ぎて、まったく歯が立たなかったのを覚えています。その中でAチームの重田・岩井先輩が6位入賞というめでたい結果となりました。Bチームは入江さんがしっかり周回し得点獲得。同志社としては嬉しい一方、私の中では何もできなかったという悔しさしかありませんでした。

来年こそは。

Ka6Eの可能性

2009年の夏。飛行中のKa6Eのコックピット内に響く機体が軋む音と隙間風。風に煽られ、他の機体より滑りやすく、浅いバンクでしか旋回できないほど当初は恐怖心がありました。本当にこの機体を乗りこなして妻沼の地で戦えるのか？と悲観的だったのを覚えています。

しかし、合宿を重ねると乗り慣れていく中でこの「よく浮き、よく粘れる」Ka6Eの魅力に取りつかれていきました。小さなサーマルでもその

中にねじ込める程の旋回半径の小ささとスイスイと上昇していく軽さ。Ka6Eにしかできない技でした。弱点としては強風時に全然前に進まないこと。これは前年の全国大会の際に地上から見て感じた事で、まるで止まっているようでした。ただし並の風であれば、トップまで一気に上昇し、滑空比のハンドはラインを見極めて飛ぶことで十分化けるのではと考えました。そこから木曾川や妻沼の研究をし始めました。熱源やトリガーはどこにあるのか？この間の失高高度は？等。いかに遠くへ効率的に飛べるかを追求し、Ka6Eの可能性を信じました。その成果もあつてか関関同立戦ではKa6Eだけが滞空し得点したパターンが何回もありました。東海関西競技会は公平性を保つためにASK23だったものの個人で準優勝できたのはKa6Eでの経験が一番だと思っています。もちろん昨年引き続き入江さんとのチームは継続、同期の川又も加わりました。

そして2回目の全国大会の舞台。期間を通じて天候に恵まれなかったものの最終日はKa6Eの特徴を活かせる気象条件となりました。関東勢と同じサーマルにも関わらず、追い抜く快感にさすがはKa6Eと興奮しました。1回目のゴールこそNo Goodだったものの粘ってからの再ゴールでOK。非常に白熱したのを覚えています。結果は個人7位、団体6位入賞。同志社として2年連続の6位入賞となりました。

ASW28の導入

4回生になった2010年。しかし、ここまで2年連続で全国大会に出場し入賞も経験した私はどこかで既に満足感や驕りがありました。本来なら

ば入江さんのようにリーダーシップを発揮し部をまとめるべき立場のはずですが、残念ながら私にはそんな器量はありませんでした。

そんな中、新機体 ASW28 の導入。性能の良さに驚き、今までのフライトスタイルを根本的に変える必要がありました。ASW28 ではすり鉢が広範囲になる分、選択範囲も増えるためサーマルの取捨選択が必要です。妻沼を例に出すと赤屋根、青屋根でわずかな高度を稼ぐだけで簡単に三洋へ到達できるので次に向かうべきポイントまで視野を広く持ちプランを立てなければいけません。それに小さいタスクでの無駄なサーマリングはハンディキャップを背負う ASW28 では自分の首を絞めることとなります。「いかにシンプルに飛ぶか」、これが全国大会に向けて ASW28 を活かす方法と考えました。

2011 年、最後の全国大会。期間を通して結果は振るいませんでしたが、1 度だけシンプルなフライトができた日がありました。3 月 11 日、離脱後にサントリーへ一直線し高度を稼ぎ千代田クリア、そしてそこからラインを取りながら少ない失高で給水塔手前の三洋へ。最低限の高度を稼いで給水塔クリアしゴール OK。27 分のフライトでデイリー 1 位を獲得。しかし、その 1 時間半後に発生した東日本大震災の影響で大会自体が中止になりました。私のグライダーはそこで終わっています。

最後に

以上の振り返りとなりましたが OB として 8 年も関わりが無く、また現在の同志社航空部の状況にも疎い私が安易に競技会優勝目指して頑張れ等、

偉そうな事は書けません。唯一アドバイスできるとしたら、空を楽しんで下さい。毎回のフライトを楽しむことで、次のステップがソロやライセンス、または ASW28 かもしれません。その時に必要となるハード面で同志社航空部は可能性に恵まれた環境だと思います。Enjoy your flight !



▲シュミレータ訓練の筆者

▼全国大会コース TP 給水塔



多くの人に支えて頂いた4年間

2013年卒 村瀬 徹

「部活で一番の思い出と近況報告」についての執筆依頼を窪田先輩から頂き、色々と自分の4年間の振り返ってみたが、考えれば考えるほど様々な出来事が思い出された。

1 回生の体験搭乗会での初フライト、暑い福井空港での合宿、初めて見る競技会の熱気。2 回生で副将となり部の運営に戸惑う日々、新人戦、ASW-28の導入、初ソロで見た夕焼けの美しさ。主将としてひたすら部の運営に奔走した3 回生、CAB受験、75周年式典で現役代表として壇上で挨拶をしたこと、28での初フライト、初めての全国大会出場。4 回生でも部の運営に忙殺される中、全国大会でもう一度飛びたい、結果を出したいと思う日々、そして最後の全国大会。最終日の最終フライトで見たあの景色とあの思いは一生忘れないだろう。

大会の結果は誇れるほどのものではなく、むしろ失望させてしまうようなものであったと思う。しかし今振り返ってみても結果に満足はしてないが、後悔するような気持ちは一切ない。あれが自分の実力であり、精いっぱいやった結果だったと思う。

たくさんの思い出の中で、正直なところ一番をつけるのが難しい。しかし、そうした思い出の一つ一つに、たくさんの人が私を支え、助けて頂いたことが自分にとっての一番の思い出ではないかと考えた。

現役のときの正直な気持ちを記せば、どうしてこんなに頑張っているのに誰も私を助けてくれないのか、どうして自分ばかり辛い思いをするのかと悩んでいたこともあった。しかし思い返せば、

自分が苦しいときには先輩や同期・後輩がそっと手を差し伸べ、何度も助けてもらっていた。

入部したばかりのころは戸惑うことばかりで、合宿ではランウェイワークもうまくできず、フライトもあまり上手ではなく周りの同期がどんどん先に進んでいく焦燥感もあった。しかし先輩方がつきっきりで指導して下さり、教官方も粘り強く指導してくださった。

中々初ソロに出られず苦しんでいたときには、同期が冗談を言って気を紛らわせてくれた。夕日が沈んでいく養老山脈、その光が反射して薄紫色に染まる木曽川、その中を行く一隻のボート。ようやく叶った初ソロで見た景色は、本当に美しかった。

主将を務めた一年間は、今思えば本当によく皆が付いてきてくれたと思う。あの頃は毎日必死で、部員を振り回し、毎日メールや電話をかけまくり、仕事の進捗を聞きまわっていた。先輩や教官方から見れば頼りなく、同期・後輩から見ればうるさいやつだっただろう。辛い思いもしたし、どうしてこんなに頑張らなければいけないのかと思うこともあった。

そんな中で、75周年式典の準備でお世話になった新庄先輩がおっしゃった言葉が私を支えてくれた。

「受け身になってはいけない。やらされていると思ったら、いつか必ずダメになる。主体性を持ちなさい。自分がやるんだ、自分からやるんだと思う気持ちを持ちなさい。」

クラブを運営するためにやらなければならない仕事。それをやらされていると思ってはいけない。なぜその仕事があるのか？それをする事で何ができるようになるのか？より良いクラブにするた

めに今こうして頑張っているんじゃないのか？

それまで辛い気持ちばかりだったが、この言葉で自分の考え方が変わり、主将をやり切ることができたと思う。

自分の勝手な判断であわや CAB が受験できないかも！？となった際は、森川監督と前田教官に助けていただき、なんとか受験することができた。

受験合宿では朝から晩まで宮地教官に指導して頂き、共に受験したメンバーを深夜まで勉強に付き合わせ、いざ受験してみれば、知識は足りない、フライトは散々な結果であったが、宮地教官が今後も面倒を見て下さるという条件でなんとか合格。当時はなんとかなって良かったとしか思っていなかったとんでもない野郎だったが、自分一人では合格はおろか受験さえできなかった。

大会の準備では本誌「翔友」の諸先輩方の記事を読み漁り、経験豊富な先輩方がアドバイスをくださり、何年も受け継がれてきた知識と経験があったからこそ、不安なく大会に臨むことができた。大会中は少しでもリラックスできるよう先輩・同期・後輩が気を配り、いつも選手のことを一番に考え、行動してくれた。結果が出れば共に喜び、出ないときも普段通りに接してくれた。

多くの人に支えられ、助けられた4年間だった。自分一人の力では何もできなかっただろう。感謝してもしきれないが、この場を借りて私を支えて下さった方々にお礼を述べたい。

卒部して6年経つが、未だに連絡を取り合う人も何人もおり、久しぶりに会えば現役のころと変わらず楽しい時間を過ごさせてもらっている。(有難いことに家族になってくれた人もいます)

現役の方は楽しいことばかりではなく、辛いこともたくさんあると思います。途中でクラブを抜ける人もいるし、最後までやり遂げることの難しさもあります。

そんなとき、落ち着いて周りを見渡せば、絶対に自分のことを見てくれている人がいます。そして、手を差し伸べてくれるはずです。

楽しかったこと・辛かったこと・大変だったこと、その全てが皆さんの大切な思い出となり、今後の糧になると思います。最後には頑張ってきてよかったと思えるような現役生活を送ることができると願っています。